

各攻撃行動の問題性と効果的な介入方法に関する現状と課題 —言語・身体・関係性攻撃の比較から—

大島 菜帆*・伊藤 大輔**

暴力行動やいじめといった「攻撃行動」は、多くの学校現場で発生し、問題となっている。攻撃行動は、身体的攻撃、言語的攻撃、関係性攻撃の3つの形態に分類され、介入方法が異なると考えられる。しかし、攻撃行動の形態を分類した上で、各攻撃行動の特徴や介入方法を検討した研究は少ない。そのため、それぞれの攻撃行動を行う者が抱える心理社会的不適応や、介入方法の差異については明確ではない。そこで、本稿では各攻撃行動の問題性に関する基礎的知見や、現在すでに実践されている攻撃行動に対する介入アプローチを概観し、各攻撃行動への効果的な介入ターゲットの検討を行った。その結果、身体的攻撃や言語的攻撃に関しては、社会的スキル、共感性などの従来の介入ターゲットの有効性が示唆された。一方で、関係性攻撃に関しては、効果的な介入ターゲットが明らかにされていないことが示唆された。したがって、今後は、関係性攻撃に対する新たな介入ターゲットを明らかにし、その有効性について検討していく必要性がある。

キーワード：身体的攻撃、言語的攻撃、関係性攻撃、認知行動療法

1. はじめに

暴力行動やいじめといった「攻撃行動」は、多くの学校で発生しており、多数の被害者に悲劇と悲しみをもたらすものであることが明らかになっている(山田, 2004)。また、加害者自身も仲間から拒否されるなどが原因で、心理社会的不適応を抱えていることが示されている(Card, Stusky, Sawalani, & Little, 2008)。特に、学校現場での攻撃行動は、いじめにつながる事が多く、近年では電子メディアの普及、なかでもSNS(Social Networking Service: 以下, SNS)の登場によって、ネット上のいじめが社会問題となっている。そのため、攻撃行動を防止し、低減するための効果的な方法を明らかにすることは不可欠であり、これまでも攻撃行動の低減をめざした実践的研究が小中学生を中心に数多く行われてきた(e.g., 高橋・小関・嶋田, 2010)。

そして、このような攻撃行動は、①身体的攻撃、

②言語的攻撃、③関係性攻撃の3つの形態に分類される。身体的攻撃とは、「叩く、蹴るなどの身体的な攻撃反応」であり、言語的攻撃とは、「怒鳴るなどの言語的な攻撃反応」である。また、関係性攻撃とは、直接的な身体的攻撃や言語的攻撃を使わずに、「仲間関係を操作する(無視、排除、陰口、噂など)ことによって相手に危害を加えることを意図した行動」と定義されている(Crick & Grotpeter, 1995)。近年では、青年期において、攻撃行動の手段としてSNS等の電子メディアを使用する傾向が高く(William & Guerra, 2007)、関係性攻撃が発生しやすいと指摘されている(Ellis, Crooks, & Wolfe, 2009)。

そして、3つの攻撃行動の形態によって、有効な介入方法は異なる可能性があるため、攻撃行動をひとくくりの問題と捉えるのではなく、形態別に細分化した上で検討する必要性が指摘されている(e.g., 松尾, 2002; Takahashi, Koseki, & Shimada, 2009)。しかし、従来の攻撃行動に関する先行研究では、攻撃行動を身体的攻撃や言語的攻撃のような直接的で目立ちやすい形態に限定

* 兵庫教育大学大学院学校教育研究科

** 兵庫教育大学

して検討されることが多かった(磯部・佐藤, 2003)。つまり、攻撃行動の形態を考慮した上で実施されている研究は少なく、各攻撃行動の特徴や有効な介入方法における差異は明らかにされていない。

そこで、本稿では、各攻撃行動と心理社会的不適応との関連を整理することによって、各攻撃行動の問題性を示した上で、各攻撃行動に対する有効な介入方法を概観することを目的とする。

2. 各攻撃行動の問題性

攻撃行動を行う者は、様々な心理社会的不適応を抱えていることが明らかにされている。そして、攻撃行動と心理社会的不適応の関連は、身体的攻撃、言語的攻撃、関係性攻撃で異なると考えられるが(Heibron & Prinstein, 2008)、各攻撃行動における問題性の差異は十分に検討されていないのが現状である。

2-1. 言語的攻撃・身体的攻撃と心理社会的不適応の関連

身体的攻撃、言語的攻撃といった直接的に相手を攻撃する者は、仲間から受け入れられず、拒絶される傾向が高い(Card et al., 2008)。そのため、心理的または物理的に孤立し、その結果、抑うつを引き起こす可能性が示唆されている(Yamasaki & Nishida, 2009)。実際に、孤独感、抑うつ・不安症状などの内在化問題(Storch, Bagner, Geffken, & Baumeister, 2004)、対人関係の困難、感情の調節不全、向社会的行動の低さといった心理社会的不適応との関連が示されている(Card et al., 2008)。また、アルコール・薬物使用などの外在化問題との関連も報告されている(Storch et al., 2004; Card et al., 2008)。さらに、言語的攻撃や身体的攻撃と心理社会的不適応との関連に男女差があることも報告されている(Storch et al., 2004)。具体的には、男性の場合、抑うつ症状と、アルコール・薬物使用に関連しているが、女性の場合は、それらに加えて、社交不安症状や孤独感と関連していることが報告されている。

2-2. 関係性攻撃と心理社会的不適応の関連

関係性攻撃は、生活満足度の低さ、仲間関係の困難(e.g., Werner & Crick, 1999)、孤独感(Storch et al., 2004)、抑うつ・不安症状などの内在化問題(e.g., Murry-Close, Osirov, & Crick, 2007)、アルコール・薬物使用等の外在化問題などの心理社会的不適応との関連が示されている(Storch et al., 2004)。そして、関係性攻撃と重複した概念である間接的攻撃は、身体的攻撃や言語的攻撃のような直接的攻撃と比較して、抑うつ・不安症状などの内在化問題と関連が強いことが報告されている(Card et al., 2008)。さらに、社会的不安の一側面である否定的評価の恐れについては、3つの攻撃行動の形態のうち、関係性攻撃のみと関連していることが明らかになっている(Loudin, Loukas, & Robinson, 2003)。

その一方で、関係性攻撃は、身体的攻撃や言語的攻撃とは異なり、心理社会的適応における不適応的な側面だけでなく、適応的な側面との関連があることが報告されている(Heilbron & Prinstein, 2008)。具体的には、関係性攻撃を行う者は、仲間グループ内で非常に人気度が高く、影響力があるとみなされていることや(Cillessen & Mayeux, 2004; Prinstein & Cillessen, 2003)、向社会的行動の高さと関連していることが示されている(Card et al., 2008)。つまり、関係性攻撃を行う者は、身体的攻撃や言語的攻撃を行う者と比較して、内面的には不適応な面を抱えているが、外面的には適応的な面がみられると推察される。

また、身体的攻撃や言語的攻撃と同様に、関係性攻撃と心理社会的不適応との関連には男女差があることも報告されている(Storch et al., 2004)。具体的には、男性の場合、孤独感、抑うつ、アルコール・薬物使用、仲間からの拒絶、自己中心性との関連が示されている。一方、女性の場合、それらに追加して、社会的不安、生活満足度の低さ、反社会的パーソナリティ特徴(反社会的行動、刺激を求める、自己中心性)、境界性パーソナリティ特徴(情緒不安定、アイデンティティの乱れ、否定的な関係、自傷)との関連が報告されている

(Werner & Crick, 1999)。

以上のことから、各攻撃行動と心理社会的不適応との関連を整理した結果、身体的攻撃や言語的攻撃は、不適応な面のみと関連しているが、関係性攻撃については、不適応な面だけでなく、適応的な面との関連が認められた。つまり、関係性攻撃自体が他の攻撃行動と比較して、顕在化しにくいという特徴も相まって、攻撃行動の問題が気づかれにくく、支援の手が届かない可能性が高い。しかしながら、関係性攻撃を行う者は、外面的には適応的な面がみられていたとしても、内面的には何らかの不適応感を抱えている可能性が高いため、支援法を検討していくことが必要であると考えられる。また、攻撃行動と心理社会的不適応との関連には男女差があり、どの攻撃行動の形態においても、男性と比較して、女性の方が多岐にわたる心理社会的不適応を抱えていることが示唆された。したがって、攻撃行動における心理社会的不適応を検討する際は男女差を考慮する必要があると考えられる。

3. 各攻撃行動への介入方法の検討

各攻撃行動を低減するための介入方法について概観した結果、共感性に焦点を当てたアプローチや、社会的スキル訓練 (Social Skills Training : 以下, SST), 問題解決訓練といった認知行動療法の有効性が示唆された (e.g., 嶋田・坂井・菅野・山崎, 2010)。そのため、本稿では、これらの技法に対応する社会的スキル、共感性、問題解決能力を取り上げ、それぞれを介入ターゲットとした先行研究の知見を紹介するとともに、各攻撃行動への低減効果の考察を行う。

3-1. 社会的スキル

文部科学省は、最近の暴力行為増加の理由として、「思いを言葉にできずに暴力で訴える」事案が増加したことをあげ (横澤, 2002), 攻撃行動をとる子どもは社会的スキルが欠如していると考えられている。そして、攻撃行動を単に低減させるばかりでなく、それに代わる適切な社会的スキル

を取得させることを目的として、SSTが実施されてきた。実際に、身体的攻撃や言語的攻撃のような攻撃行動への対応法として、SSTの有効性が示されている (Nangle, Erdley, Carpenter, & Newman, 2002 ; 原田・渡辺, 2011)。

しかし、各攻撃行動のうち、関係性攻撃には、SSTが有効でない可能性がある。なぜなら、関係性攻撃傾向の高い者は、特定の対象を傷つけるために、仲間を巧みに操作し集団を意図的に動かすなど (ex. 噂を広める), 他者のサポートと支援を得るために社会的スキルを使用しており (Card et al., 2008), 社会的スキルの不足により攻撃行動頻度が高まっているわけではないことが示唆されているためである (松尾, 2002)。実際に、幼児を対象とした研究では、関係性攻撃を高く示す幼児は、規律性スキルは欠けるが、友情形成スキルや、主張性スキルは比較的優れていることも示されている (磯部・佐藤, 2003)。したがって、SSTは身体的攻撃や言語的攻撃の低減に効果的であると考えられるが、関係性攻撃の低減には効果的でない可能性がある。

3-2. 共感性

いじめの加害者は、被害者の反応に対して、悲しみ、恐怖などのネガティブな感情が生じることがないために、冷淡にいじめを継続するとされていることから、共感性に欠けることが攻撃行動につながると考えられている (Arsenio & Lemerise, 2001)。そのため、共感性は、向社会的行動を増加させ、身体的攻撃や言語的攻撃のような攻撃行動を低減させる要因とされてきた (櫻井・葉山・鈴木・倉住・萩原・鈴木他 2011)。例えば、Espelage, Low, Polanin, & Brown (2013) は、攻撃行動を身体的攻撃と言語的・関係性攻撃に分類し、それぞれに対して、共感性の向上を介入要素に含んだプログラムの効果を検討している。その結果、身体的攻撃には効果がみられたものの、言語的・関係性攻撃には効果はみられなかった。

以上のことから、共感性を増加させるアプローチは、身体的攻撃には効果的であるといえる。し

かし、言語的攻撃に対しての低減効果は一貫しておらず、関係性攻撃に対しては効果的でないと考えられる。

その一方、近年、取り上げられているポジティブな感情に対する共感性では、関係性攻撃を低減できる可能性がある。具体的には、これまでの共感性研究では、苦しみや不幸といった他者のネガティブな感情への共感に焦点を当てられてきたが、喜びや嬉しさといった他者のポジティブな感情への共感も取り上げられるようになってきている(e.g., Saliquist, Eisenberg, Spinrad, Eggum, & Gaertner, 2009)。そして、ポジティブな感情への共感、従来取り上げられてきたネガティブな感情への共感と比較して、攻撃行動と強い関連があることが示されている。例えば、大学生を対象とした研究で、ネガティブな感情への共感と攻撃行動の間には関連がみられず、ポジティブな感情への共感において、直接的攻撃や関係性攻撃との負の関連が示されている(櫻井他, 2011)。したがって、従来のように、他者のネガティブな感情への共感性を用いたアプローチではなく、ポジティブな感情への共感性といった新しい変数への介入を検討することで、身体的攻撃や言語的攻撃のみならず、関係性攻撃の低減につながる可能性が考えられる。

3-3. 問題解決能力

攻撃行動を頻繁に示す子どもは、向社会的解決策が少なく、攻撃的解決策を多く案出することや(Lochman & Dodge, 1994)、攻撃的解決策を肯定的に評価する、または向社会的解決策を肯定的に評価できないことが報告されている(Fontaine, Burks, & Dodge, 2002)。また、攻撃的な子どもや行為の問題を抱える子どもにおいては、社会的情報処理の欠如と歪みがみられ(Kendall, 2006)、その結果、社会的問題解決の問題を抱えるとされている(Lochman, Powell, Whidby, & Fitzgerald, 2006)。そして、実際に、身体的攻撃や言語的攻撃のような攻撃行動に対して、問題解決訓練の有効性が示されてきた(e.g., Lochman, Wells, & Lenhart, 2008)。

しかし、3つの攻撃行動の形態を分類した上で実践されている問題解決訓練の知見は一貫していない。具体的には、小関・丹野・小関・嶋田(2011)では、高校生を対象とし、対人葛藤場面に対する関与形態のアセスメントに基づく問題解決訓練を実施している。そして、直接的に攻撃行動に関与する者(攻撃行動を示す、もしくは攻撃対象となる者)に対して、身体的攻撃と関係性攻撃に低減効果がみられたことが示されている。小関他(2011)の研究では、直接的に攻撃行動に関与する者に、攻撃行動を行う者だけでなく、攻撃対象となる者も含まれているため、攻撃行動を行う者のみを対象とした場合にも、身体的攻撃や関係性攻撃に低減効果がみられるかは明確でない。しかしながら、問題解決訓練によって身体的攻撃や関係性攻撃に低減効果がみられ、問題解決訓練が身体的攻撃や関係性攻撃に有効である可能性が示唆されたといえる。

また、中学生に対して、リラクゼーションや解決策の効果検証訓練を組み合わせた問題解決訓練を実施した高橋他(2010)の研究では、対象者全員において、身体的攻撃のみ有意な低減効果がみられたものの、言語的攻撃や関係性攻撃には有意な低減効果がみられなかった。一方で、攻撃行動傾向の高い中学生のみを対象として分析した場合、自己評定では、すべての攻撃行動の形態に低減効果がみられず、教師評定では、身体的攻撃と関係性攻撃が有意に減少したことを報告している。しかし、関係性攻撃は、被害者や周囲の人に誰が攻撃の首謀者であるのかを知られないように間接的に行われる傾向がある(磯部, 2001)。つまり、外部からは頻度が評定しにくい攻撃行動であると考えられるため、教師評定は、関係性攻撃を測定する方法として妥当でない可能性が高い(高橋他, 2010)。この点を踏まえると、攻撃行動傾向の高い中学生の関係性攻撃に低減効果があったかどうかは疑問が残る。

さらに、小学生を対象に解決策を探る能力といった問題解決能力を構成要素にいた介入研究においては、身体的攻撃には効果がみられたもの

の、言語的および関係性攻撃には低減効果がみられなかったことが示されている (Espelage et al., 2013)。

これらの知見から、問題解決訓練は、各攻撃行動の形態に対する低減効果が一貫していないものの、身体的攻撃には有効である可能性が示唆された。また、小関他 (2011) の知見から、問題解決訓練の関係性攻撃への有効性は今後検討していく必要があると考えられるものの、Espelage et al. (2013) や高橋他 (2010) の知見からは、問題解決訓練は関係性攻撃に有効でない可能性が示唆された。

以上のように、これまでの攻撃行動に対する介入方法とその効果について概観した結果、身体的攻撃や言語的攻撃に関しては、社会的スキルや共感性に着目した介入方法の有用性が示唆されていると言える。一方で、関係性攻撃に関しては、社会的スキル、共感性、問題解決能力に着目した介入方法では、十分な改善効果が得られない可能性が示唆された。実際に、関係性攻撃の低減を目的とした一般的ないじめプログラムの系統的なレビューを行った研究でも、関係性攻撃の低減に有効的なプログラムは明らかにならなかったことが指摘されている (Leff, Waasdorp, & Crick, 2010)。つまり、関係性攻撃の低減に対して効果的な要因は不明瞭であるため (Sukhodolsky, Smith, McCauley, Ibrahim, & Piasecka, 2016)、関係性攻撃の特徴やその介入方法に関する実証研究が望まれる。

4. 今後の課題と展望

本稿では、各攻撃行動と心理社会的不適応との関連を整理することによって、各攻撃行動の問題を示した上で、各攻撃行動に対する有効な介入方法を概観することを目的とした。

今後の課題としては、第一に、関係性攻撃の低減をもたらす新たな介入ターゲットの検討が必要である。例えば、マインドフルネスは、攻撃行動の低減に貢献することが実証的に明らかにされている (Heppner, Kernis, Lakey, Campbell,

Goldman, Davis, & Cascio, 2008; 平野・湯川, 2013)。また、「怒りというネガティブな体験に関する非意図的で再帰的な思考に努める傾向」と定義されている怒り反すうは (Sukhodolsky, Golub, & Cromwell, 2001)、身体的攻撃や言語的攻撃のような表出的な攻撃行動よりも、関係性攻撃を有意に予測することが示されている (Moretti & Peled, 2010)。したがって、マインドフルネスや怒り反すうと関係性攻撃の関連を検討することによって、関係性攻撃を改善するための介入ターゲットとして妥当かどうかを検討することが望まれる。また、近年は、SNS等の電子メディアが普及し、関係性攻撃を行う手段として用いられ、攻撃方法が変化していると考えられる。そのため、SNS等の電子メディアの使用を考慮した介入プログラムを開発していくことが必要であろう (Leff, Waasdorp, Crick, 2010)。

第二に、身体的攻撃や言語的攻撃に関しても、それぞれの攻撃行動の特徴に適した介入ターゲットを明確にし、介入プログラムを開発していく必要がある。なぜなら、問題解決能力、共感性など複数の認知行動要因を組み合わせた介入プログラムの有効性を検討している研究が多く、各攻撃行動の低減に効果的な要因は、詳細に特定されていないためである (DiGiuseppe & Lee, 2018)。したがって、関係性攻撃だけでなく、身体的攻撃や言語的攻撃に対しても、それぞれの特徴にあった介入方法を検討していくことで、攻撃行動をより効果的に低減させることができると考えられる。

最後に、本稿では、小学生、中学生、高校生、大学生などの年齢差や、各攻撃行動における性差を考慮せずに検討を行ったものの、それらを考慮した検討が望まれるだろう。例えば、年齢とともに社会的スキルは向上していくことや、共感性と各攻撃行動との関連が小学生と中学生で異なることが示唆されている (村上・西村・櫻井, 2014)。特に、本邦における攻撃行動の研究は、小中学生を対象としたものが比較的多く (e.g., 高橋他 2010)、高校生を対象とした研究は少ない。しかしながら、高校生は、「パソコンや携帯電話等で、

誹謗・中傷や嫌なことをされる」といったネットいじめの発生率が小中学生よりも高いという特徴を有するため(文部科学省, 2018), 高校生を対象とした実証データに基づいた攻撃行動の特徴やその介入法を検討していくことも必要であろう。また, 性差については, 一般的に, 男性は, 身体的攻撃や言語的攻撃のような攻撃行動をとりやすく, 女性は, 言語的攻撃や関係性攻撃をとりやすいと考えられてきたが(e.g., Lagerspetz, Björkqvist, & Peltonen, 1988; Tomada, & Schneider, 1997; 日比野, 2003), 近年の研究では異なる知見も見出されている。例えば, 男性は女性よりも, 直接的な攻撃を行う傾向があるが, 間接的攻撃では性差はほとんどなかったことや(Card et al., 2008), 従来の研究知見に反して, 男性が女性よりも, 身体的攻撃や言語的攻撃, 関係性攻撃を行うことも示されており(Storch et al., 2004), 結果は一貫していない。これらには, 電子メディアが普及し, 攻撃行動の形態が変化していることが考えられることから, 今後は, 年齢や性差とともに, SNS等の電子メディアの普及を考慮した検討が望まれる。

5. 引用文献

- Arsenio, W. F., & Lemerise, E. A. (2001). Varieties of childhood bullying: Values, emotion processes, and social competence. *Social Development, 10*, 59-73.
- Card, N. A., Stusky, B. D., Sawalani, G. M., & Little, T. D. (2008). Direct and Indirect Aggression During Childhood and Adolescence: A Meta-Analytic Review of Gender Differences, Intercorrelations, and Relations to Maladjustment. *Child Development, 79*(5), 1185-1229.
- Cillessen, A. H. N., & Mayeux, L. (2004). From censure to reinforcement: developmental changes in the association between aggression and social status. *Child Development, 75*(1), 147-163.
- Crick, N. R., & Grotpeter, J. K. (1995). Relational aggression, gender, and social psychological adjustment. *Child Development, 66*(7), 10-722.
- DiGiuseppe, R., & Lee, A. H. (2018). Anger and aggression treatments: a review of meta-analyses. *Current Opinion in Psychology, 19*, 65-74.
- Ellis, W. E., Crooks, C. V., & Wolfe, D. A. (2009). Relational Aggression in Peer and Dating Relationships: Links to Psychological and Behavioral Adjustment. *Social Development, 18*, 253-269.
- Espelage, D. L., Low, S., Polanin, J. R., & Brown, E. C. (2013). The Impact of a Middle School Program to Reduce Aggression, Victimization, and Sexual Violence. *Journal of Adolescent Health, 53*, 180-186.
- Fontaine, R. G., Burks, V. S., & Dodge, K. A. (2002). Response decision processes and externalizing behavior problems in adolescents. *Development and Psychopathology, 14*(1), 107-122.
- 原田恵理子・渡辺弥生(2011). 高校生を対象とする感情の認知に焦点をあてたソーシャルスキルトレーニングの効果 カウンセリング研究, *44*(2), 81-91.
- Heilbron, N., & Prinstein, M. J. (2008). A Review and Reconceptualization of Social Aggression: Adaptive and Maladaptive Correlates. *Clinical Child and Family Psychology Review, 11*, 176-217.
- Hepner, W. L., Kernis, M. H., Lakey, C. E., Campbell, W. K., Goldman, B. M., Davis, P. J., & Cascio, E. V. (2008). Mindfulness as a means of reducing aggressive behavior: Dispositional and situational evidence. *Aggressive Behavior, 34*, 486-496.
- 日比野桂(2004). 第3章 攻撃の個人差 攻撃の心理学 秦一士・湯川進太郎(編) B. クラウエ(著) 北大路出版.
- 平野美沙・湯川進太郎(2013). マインドフルネス瞑想の怒り低減効果に関する実験的検討 心理学研究, *84*, 93-102.
- 磯部美良(2001). 子どもの関係性攻撃に関する研究の展望 広島大学大学院教育研究科紀要,

- 50, 379-386.
- 磯部美良・佐藤正二 (2003). 幼児の関係性攻撃と社会的スキル 教育心理学研究, 51, 13-21.
- 小関俊祐・丹野恵・小関真実・嶋田洋徳 (2011). 対人葛藤場面に対する関与形態のアセスメントに基づく問題解決訓練が高校生の攻撃行動とストレス反応に及ぼす影響 ストレスマネジメント研究, 8(1), 31-38.
- Kendall, P. C. (2006). Guiding theory for therapy with children and adolescents. In P. C. Kendall (Ed.) *Child and adolescent therapy: Cognitive-behavioral Procedures*. 3rd ed. New York: Guilford Press, 3-30.
- Lagerspetz, K.M.J., Björkqvist, K., & Peltonen, T. (1988). Is indirect aggression typical of females? Gender difference in aggressiveness in 11-to12-year-old children. *Aggression Behavior*, 14, 403-414.
- Leff, S. S., Waasdorp, T. E., & Crick, N. R. (2010). A Review of Existing Relational Aggression Programs: Strengths, Limitations, and Future Directions. *School psychology review*, 39(4), 508-535.
- Lochman, J. E., & Dodge, K. A. (1994). Social-cognitive processes of severely violent, moderately aggressive, and nonaggressive boys. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 62(2), 366-374.
- Lochman, J. E., Powell, N. R., Whidby, J. M., & Fitzgerald, D. P. (2006). Aggressive children: Cognitive-behavioral assessment and treatment. In P. C. Kendall (Ed.) *Child and adolescent therapy: Cognitive-behavioral Procedures*, 3rd ed. New York: Guilford Press, 33-81.
- Lochman, J. E., Wells, K. C., & Lenhart, L. A. (2008). Coping Power: *Child group program : Facilitator guide*. New York: Oxford University Press.
- Loudin, J. L., Loukas, A., & Robinson, S. (2003). Relational Aggression in College Students: Examining the Roles of Anxiety and Empathy. *Aggressive Behavior*, 29, 430-439.
- 松尾直博 (2002). 学校における暴力・いじめ防止プログラムの動向—学校・学級単位での取り組み— 教育心理学研究, 50, 487-499.
- Moretti & Peled. (2010). ruminating on rumination: are rumination on anger and sadness differentially related to aggression and depressed mood?. *J psychopathol behavior assess*, 32, 108-117.
- 文部科学省 (2018). 児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査 https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/seitoshidou/1302902.htm (参照2020年9月25日).
- 村上達也・西村多久磨・櫻井茂男 (2014). 小中学生における共感性と向社会的行動および攻撃行動の関連：子ども用認知・感情共感性尺度の信頼性・妥当性の検討 発達心理学研究, 25(4), 399-411.
- Murry-Close, D., Ostrov, J. M., & Crick, N. R. (2007). A short-term longitudinal study of growth of relational aggression during middle childhood: Associations with gender, friendship intimacy, and internalizing problems. *Development and Psycho-pathology*, 19, 187-203.
- Nangle, D. W., Erdley, C., Carpenter, E. M., & Newman, J. E. (2002). Social skills training as a treatment for aggressive children and adolescents: a developmental-clinical integration. *Aggression and Violent Behavior*, 7(2), 169-199.
- Prinstein, M. J., & Cillessen, A. H. N. (2003). Forms and Functions of Adolescent Peer Aggression Associated With High Levels of Peer Status. *Merrill-Palmer Quarterly*, 49(3), 310-342.
- 櫻井茂男・葉山大地・鈴木高志・倉住友恵・萩原俊彦・鈴木みゆき・大内晶子・及川千都子 (2011). 他者のポジティブ感情への共感的感情反応と向社会的行動, 攻撃行動との関係 心理学研究, 82(2), 123-131.
- Saliquist, J., Eisenberg, N., Spinrad, T. L., Eggum, N. D., & Gaertner, B. M. (2009). Assessment of pre-

- schoolers' positive empathy: Concurrent and longitudinal relations with positive emotion, social competence, and sympathy. *The Journal of Positive Psychology, 4*(3), 223-233.
- 嶋田洋徳・坂井秀敏・菅野純・山崎茂雄 (2010) . 中学・高校で使える人間関係スキルアップ・ワークシート, 学事出版.
- Storch, E. A., Bagner, D. M., Geffken, G. R., & Baumeister, A. L. (2004). Association between overt and relational aggression and psychosocial adjustment in undergraduate college students. *Violence and Victims, 19*(6), 689-700.
- Sukhodolsky, D. G., Golub, A., & Cromwell, E. N. (2001). Development and validation of the anger rumination scale. *Personality and Individual Differences, 31*, 689-700.
- Sukhodolsky, D. G., Smith, S.D., McCauley, S.A., Ibrahim, K., & Piasecka, J. B. (2016). Behavioral Interventions for Anger, Irritability, and Aggression in Children and Adolescents. *child adolescent psychopharmacology, 26*(1), 58-64.
- Takahashi, F., Koseki, S., & Shimada, H. (2009). Developmental trends in children's aggression and social problem-solving. *Journal of Applied Developmental Psychology, 30*, 265-272.
- 高橋史・小関俊祐・嶋田洋徳 (2010). 中学生に対する問題解決訓練の攻撃行動変容効果 行動療法研究, *36*(1), 69-81.
- Tomada, G., & Schneider, B. H. (1997). Relational aggression, gender, and peer acceptance: Invariance across culture, stability over time, and concordance among informants. *Developmental Psychology, 33*, 601-609.
- Werner, N. E., & Crick, N. R. (1999). Relational Aggression and Social-Psychological Adjustment in a College Sample. *Journal of Abnormal Psychology, 108*(4), 615-623.
- Williams, K. R., & Guerra, N. G. (2007). Prevalence and predictors of Internet bullying. *Journal of Adolescent Health, 41*, 14-21.
- 山田尚子 (2004). 第6章 公共の場における攻撃 攻撃の心理学 秦一士・湯川進太郎(編) B. クラーエ(著) 北大路出版.
- Yamasaki, K., & Nishida, N. (2009). The relationship between three types of aggression and peer relations in elementary school children. *International Journal of Psychology, 44*(3), 179-186.
- 横澤徹二 (2002) . 校内暴力の実態と対応 松原達哉(編) スクールカウンセリングの実践技術6—「暴力・非行」指導の手引き— 教育開発研究所.

Current status and issues regarding the problems and effective intervention methods of aggressive behavior -Comparison of verbal, physical, and relational aggression-

Naho OSHIMA*, Daisuke Ito**

*Graduate School of Education, Hyogo University of Teacher Education

**Hyogo University of Teacher Education

Key word: physical aggression, verbal aggression, relational aggression, cognitive behavioral therapy

Aggressive behavior such as violence and bullying occur in many schools, and is a problem. Such behavior is classified into three forms- physical, verbal, and relational-, and it is pointed out that the intervention is different. However, few studies have examined the characteristics and the intervention used to target the particular type of aggressive behavior. As the results, we are not certain of the type of psychosocial maladaptation that related to the different types of aggressive behavior and how the interventions designed for different type differ. Therefore, in this paper, we overviewed the basic findings of the problematic nature of each aggressive behavior, and the interventions used to examine identifying the effective targets. The results suggested that social skill and empathy are effective intervention components for physical and verbal aggression while no effective target is identified for relational aggression. For future, it is necessary to shed light on new intervention targets for relational aggression and examine their effectiveness.